

わけあつて極道の妻になりました

目次

わけあつて極道の妻になりました

5

番外編 こんな何気ない日常が

283

わけあって極道の妻になりました

たった今自分の身に起きている災難を予知できたとしたら、絶対にこの道を通らなかつただろう。穏やかな小春日和の、屋下がりの路地裏。ここは、都心から少し離れた駅の近くにある料亭の前だ。表通りの喧騒も届かない、趣に満ちた古い家々が軒を連ねる閑静な通り。本来ならば、自分は今頃その先にあるカフェで、まつたりとした至福の時を過ごしていたはずだ。それなのに、カフェに向かう途中でなぜか強面の男にいきなり手を掴まれ……

萬木いちかは、じんじんと痛みを発している手首に、震えながら目をやった。

ありきたりなベージュのコートの袖口から突き出た手首は、浅黒く肉厚な男の手に握られている。明らかにその筋の者とわかる、小指の欠けた手に。

「いまして、兄貴！」

その男は通りに面した生け垣の中に向かって声を張り、いちかの腕を強く引つ張った。

通りにひしめく男たちが一斉に道を空ける。我に返ったいちかは、身体を斜めに引きずられつつも助けを求めようとするが、どこを見ても、凶悪な顔つきをした男しかいない。

「は、放してください……！」

黒のパンプスを履いた足を地面に踏ん張って、男の手を振りほどこうとする。男がいらいらした様子でいちかを振り返った。

(ひいっ……！)

その顔の恐ろしさに一瞬で全身が凍りつく。

顔面凶器——そう言い表すにふさわしい男の顔は眉がほとんどなく、額と眉間に深く皺が寄せられていた。チツ、と舌打ちした口の中、前歯があるべきところにはいくつかぼっかりと穴が。

「おいこら、大声出すなや。サツ呼ばれたら面倒じゃろうが」

「わわわわわかりましたあつ」

飛び出したのは素つ頓狂な声。恐怖のあまり脚はがくがく震え、心臓が今にも張り裂けそう。男に手を引かれ、敷居に突っかかりそうになりながら料亭の数寄屋門を潜る。

「今日は兄貴の祝言なんじゃがのう、新婦がビビって直前に逃げよつたんじゃ。客がようけ集まるとるけん、そのまま帰らせるわけにゃあいかんからの」

「しゅ、祝言!？」

(どうして私をそんな場に!?)

「あ、あの、その新婦さんとは連絡がつかないんですか？」

「それができんからアンタに代わりになつてもらおうと声掛けたんじやろ。元の新婦は組の若いモンがその辺から無理やり引つ張ってきた女じゃけえ、ケータイ番号もわからんしな」

敷き詰められた砂利の上を進む男の背中を凝視しつつ、ごくりと唾をのむ。

こんな恐ろしい男たちに囲まれたら、誰だって逃げ出すだろう。いちかだって悲鳴のひとつも上げたかったが、喉に綿でも詰まったように声が出ない。抵抗も虚しく、料亭の広い玄関に足を踏み入れたのだった。

カポーン。

庭の鹿威しが、場違いなまでに優雅な音を響かせている。

若い畳の匂いに満ちた部屋で、いちかは身じろぎもせず座っていた。

二十帖はありそうな和室の両側にずらりと居並ぶのは、紋付袴姿の男たち。彼らは部屋の真ん中に敷かれた赤い絨毯を挟み、向かい合って胡坐をかいている。

角刈り、スキンヘッド、きれいに整えた口ひげ、眉間に刻まれた深い皺。それぞれ違いはあれど、いずれもひと目で一般の人ではないとわかる風貌だ。

いちかにとっては、部屋の中がざわついていることと、何より、頭に綿帽子を被っていることが救いだった。これのお陰でいい感じに視界が遮られ現実逃避ができる。

繊細な鶴の刺繍が施された白無垢は、思わずうっとりから見入ってしまう美しさだった。

ただ、それを着ているのが自分自身、というのが信じられないだけで――

萬木いちかは小学校の教員をしている。二十七歳で独身。男女の出会いはいは少なく、彼氏はいない。いた経験すらない。現役で小学校の校長をしている父と、元教員である母のもとに生まれ、大学卒業以来、真摯な思いで教育に心血を注いできた。

身長体重ともに平均ならば、顔も平均だと思う。ややコンプレックスに感じているのは、垂れ目と童顔。唯一自分の顔で好きな部分は、笑うと頬に浮かぶえくぼだろうか。

肩下まである黒髪を染めたこともなければ、パーマを掛けたこともない。後ろでひとつに縛るという中学生の頃から変わらぬヘアスタイルのせいもあってか、友人には『真面目すぎる』と言われる。

小中学校と、あだ名は『委員長』だった。確かに生真面目だし、お節介で何にでも首を突っ込むところがある。それに両親に厳しく育てられたお陰で、不正を働いたり、約束を違えたりする自分が許せないのだ。

そんないちかが、ヤクザのような世間の道理の外にいる人たちと関わることなど、一生ないはずだった。それが、あろうことか見も知らぬどこかの組長と、身代わりで結婚させられるなんて……そもそも、どうしてこんなことになったのか。不安と恐怖に押し潰されそうななか、ここに至る経緯を思い返してみる。

今日は土曜日で学校は休みだった。一週間頑張って働いたので、来週のために英気を養おうと、ひとりで暮らしているアパートの部屋でのんびり過ごしていたところ――

用務員から緊急の電話が入ったのは、昼を少し回った頃だった。いちかが担任をしている一年生のクラスの児童が、朝遊びに出たきり戻らないと、保護者である父親から連絡があったのだ。

急いでアパートを飛び出して電車に乗り、駅に着くなり学校まで走った。

休日開放で校門の鍵は開いていた。近くの公園を探してみようと、職員室から自転車の鍵を取って駐輪場へ着いた時、校庭の隅に見慣れた小さな影を見つけたのだ。

小柄な少年は、ひとり黙々と穴を掘っていた。聞くと、お宝発掘のテレビ番組を見て、校庭にも何かすごいものが埋まっているのでは、と考えたらしい。そういえば、『この小学校は今年で創立一二〇周年だよ』と、いちかはず日の帰りの会で話した。学校の校庭にも何かお宝が埋まっているのでは、と少年が期待したのも無理はない。

その後いちかは、校庭に穴を掘ってはいけない理由と、教室で何度も教えてきた外で遊ぶときのルール——行き先と帰る時間を家族に伝える、できるだけひとりでは遊ばない、などをもう一度話して聞かせ、彼を自宅まで送り届けたのだった。

帰りの電車で揺られつつ、いちかは安らぎと充実感を覚えていた。休日出勤したとはいえ、児童の安全は無事守られ、意味のある指導ができたのだ。平穏な日常が戻ってきたなら、それでいい。そう、そこまではよかったのだ。

いちかは深くうなだれて、自分が今置かれている境遇を呪った。

この料亭の前さえ通らなければ、こんな目には遭わなかったはずだ。まっすぐに家へ帰ればいいものを、なぜ今日に限って、お気に入りのカフェの存在を思い出してしまったのか……

(もう、もう、私のバカーー！)

心の中で自分の頭をボカスカたいたいて、すぐに、いや、と思い直す。

むしろ、休日出勤をした今日だからこそ、自分を癒したかったのだ。

黄金色をした蜜のかかったふかふかのパンケーキ。バリスタが厳選したという深煎りコーヒー豆をサイフォンで丁寧に抽出した豊かな香り……

あの芳醇な香りもビジュアルも魅力的すぎた。早くありつきたいあまりに、物々しい黒服の集団の中を突っ切ろうと考えてしまうほど。その途端、まさか男に手を掴まれるなんて思いもせず——

その時、ふいに廊下が慌ただしくなり、いちかはハッとした。

ついに新郎がやってきたのだろうか。ざわついていた室内から音が消え、静寂が広がる。

とん、とん、と廊下の板張りを踏みしめる音。目の前に居並ぶ男たちよりも、さらに恐ろしいビジュアルの花婿姿が脳裏に浮かび、身を硬くする。

入り口の引き戸が勢いよく開いて、びくっ！ といちかは飛び跳ねた。

「大変お待たせいたしました」

朗々と響いた男の声に、胸が割れんばかりに鼓動が激しくなる。想像していたよりも若い声だ。恐るおそる顔を上げて、綿帽子の向こうにその姿を捉える。

光沢のある紋付に身を包んだ男が、身を屈めて鴨居を潜つてくるところだった。部屋の入り口でスツと顔を上げた男の姿に、思わず目を見張る。

ほかの人よりも頭ひとつ分は高いすらりとした背丈。細身だが肩幅が広く、首はがっしりと太い。歳は三十代前半くらいだろうか。三白眼ぎみの鋭い目つきに精悍な顔立ちで、豊かな黒髪をびっちり後ろへ撫でつけている。

姿勢よく背筋をピンと伸ばした立ち姿は、とてもヤクザのイメージとは結びつかない立派な好青年のそれだった。

（これが……ヤクザの組長？）

悔しいけれど、和装の似合うきりりとした表情には、『イケメン』以外の言葉が見つからない。じっと見ていると目が合い、慌てて視線を外した。

男がいちかの隣にやってきて、用意された座布団の上に正座する。一旦は静かになった会場が、またざわつき始めていた。

「おい」

広げた扇子を口元に当てて、男が声を掛けてくる。

「は、はいっ……。なななんでしょう」

慌てて返事をするが、声が馬鹿みたいに震えてしまう。男が鼻で笑いつつ、肩を寄せてきた。

「突然のことで悪かったな。手荒な真似はされなかったか？」

「はい……特には」

いちかは白打掛の袖口を強く握りしめた。男がじっとこちらを見つめているのが綿帽子越しにもわかって、恐怖やら、変にどぎまぎするやらで生きた心地がしない。すると、男が一層距離を縮めてきたので鋭く息をのむ。

「震えてるようだが……大丈夫か？」

低い声が布越しに響く。もし綿帽子を被っていないなかつたら、男の唇が耳に触れそうだ。

「だっ、大丈夫ですっ！」

自分でも思いもよらない大きな声が出てしまった。どやされるのでは、と勢いよく男を振り向いて、威圧感に満ちた目に思わず釘付けになる。

いちかが男としつかりと目を合わせたのは、これがはじめてだ。

力強い三白眼の眼差しが、揺らぎもせずはこちらを覗き込んでいた。澄んだ白目に、黒々とした瞳。真一文字に引き結ばれた唇は薄く、わずかに口角が上がっている。

最初に思った通り、骨格のがつしりとした凛々しい顔立ちだ。きらきらした瞳に吸い込まれそうになり、目をしばたたく。

男はいちかの目をまっすぐに見て、真面目な表情になった。

「言っておくが、お前に危害を加えるつもりはない。所帯を持つことを条件に親父から新しいシマをもらえる話になってるんだ。式が終わったら解放してやるから安心しろ」

落ち着いた口ぶりのためか、不思議とその言葉に偽りはない気がする。

おずおずと頷くと、男はすっと目を細め、一瞬優しそうな笑みを浮かべた。しかし扇子を下ろすと同時に冷たい眼差しで前を見据える。

「それでは皆様、ご静粛に願います。これより、九条組組長九条龍臣、婚礼の儀を執り行います。本日の司会進行を務めさせていただきます、新藤組若頭 嶋浩一郎でございます」

礼服を着た男の一礼に合わせて拍手が起こった。

新郎の男——九条龍臣というらしい——は座布団から下りると、正座した状態で少し踵を上げ、

三つ指をつく。

「本日は蒼龍会本部、並びに系列各組の諸兄方におかれましては、お忙しいなかご参列いただきまして誠にありがとうございます。所用のため、到着が遅くなりましたこと、平にお詫び申し上げます——」

その時、料亭の外の通りから轟音が響いて、いちかは小さく悲鳴を上げた。次いで、ガタン、バタンと何かがぶつかる音。最初に聞こえたのは車が事故を起こしたと思しき音だったが、そのあとは、料亭の外側にぐるりと巡らされた板塀に、重いものがぶち当たるような音だ。  
(な、何……!?)

無意識のうちに、隣に座る龍臣のほうへにじり寄る。

不穏な状況に固唾をのんでいるのはいちかだけではない。会場は一気に色めき立ち、ついさつきまで静かに座っていた紋付袴の男たちが、片膝を立てておの顔を見合わせている。

龍臣の大きな身体がいちかの前に立ちほだかり、影を作った。

「下がってるよ。おそらく出入りだ」

「……でいり？」

「出入りつてのは、敵対する組のところに襲撃をかけるってことだ。ここんどこ、仕事がらみでトラブった相手にアヤつけられてるんでな。しかし——」

白目がちな龍臣の目がざらりと輝き、口角がにんまりと上がる。

「この俺の盃事を穢すとはふてえ野郎だ……」

(ちよ——)

その笑顔があまりにも残忍そうだったので、息を吸い込み両手で口を押さえる。

さつき一瞬でもこの男を優しいかもしれないと思ったことを、いちかは後悔した。所詮ヤクザはヤクザ。市井に生きる一般人とは違うのだ。

いちかにとつて、今はこの状況を生き伸びるのが何よりも大事なことだった。ここで泣き叫びでもしたら、一体何をされるかわからない。

料亭の玄関がにわかに騒がしくなった。それを号令にしたかのように、礼装の客たちが一斉に部屋を飛び出していく。大勢の人間が靴のまま廊下を走る音、ドスの利いた怒号が入り乱れ、風雅な料亭は一転して戦場になった。

「オラア、九条はいるかー！」

派手なシャツを着た太った男が、障子を踏み倒して部屋の中に入ってくる。いちかは震え上がった。男が肩に担いでいるのは鉄パイプだろうか。

「いるよ。あいにく取り込み中だがな」

相変わらずいちかを隠すようにして立ちほだかっている龍臣が、しれっとして言う。

太った男は何かをわめき散らしながら、龍臣に襲いかかってきた。

「きゃあー！」

いちかは跳びささろうとして派手に転んだ。長い時間正座を続けていたせいで足が強烈に痺れている。よりによって、こんな時に。

龍臣は三々九度のために置かれていた塗り盆を取り上げて応戦した。男の攻撃を受けた瞬間に真つ二つに割れた塗り盆を投げ捨て、同時に男の首を掴み背中側にひねり上げる。太った男は鉄パイプを取り落とし、丸々とした顔を真つ赤に染めて呻いた。

「おい、何してんだ、早く逃げる！」

龍臣がいちかに向かつて叫ぶ。

「そ、それが、足が痺れて」

と、言いながら立ち上がろうとして、またその場にくずおれる。まるで膝から下が棒切れか何かにすり替えられたみたいだ。

「はあ？ どうにかして逃げるよ。怪我するぞ」

「そんなこと言われても——」

そこへどかどかと靴音が響き、障子のなくなった入り口に別の男たちが現れた。

「いたぞ！ 九条を狙え！」

それぞれ武器を手にした男たちが踏み込んでくる。龍臣は太った男の腹を蹴り飛ばし、さつき男が落とした鉄パイプを拾った。

半ばパニックになったいちかは、男たちが入ってきたのとは反対側の廊下へ這うように向かった。今や脚だけでなく、腰からも力が抜けそうだ。

やっとのことで廊下に出ると、そのまま奥へと向かう。なんとか端の部屋にたどりつき、障子を開けて中に飛び込む。ぴしやりと障子を閉め、震える息を吐き出した。

部屋の中には誰もいない。ここはいちかが最初に連れてこられた、控えの間として使われているらしい狭い部屋だ。料亭に引きずり込まれたあと、ここで『姐さん』と呼ばれていた中年の女性に着付けをされたのだった。

部屋の隅に置かれたスチール製のハンガーラックに目をやって、ホッと息をつく。よかった。ここに来るときに着ていたスーツと鞆がちゃんどある。

ようやく脚の感覚が戻ってきたので、ふらつきながらも立ち上がってみた。大丈夫そうだ。急いでハンガーラックへ向かい、花嫁衣裳一式を脱ぎにかかると。

しかしこれがどうにも厄介だった。白無垢なんてはじめて着たし、そもそも浴衣以外の和服は成人式以来だ。綿帽子とかつら、白打掛、帯締め、帯、帯揚げ、長襦袢、肌襦袢……辛うじて名前だけ知っているパーツをひとつひとつ解いていく。手が震えて思うように動かない。だいぶ時間を掛けてすべてを脱ぎ、シャツをハンガーから外した時——

スパーン！ と音がして、部屋の障子が勢いよく開いた。鋭く息をのみ、キャミソールの胸元にシャツを押しつける。

「おう、アンタが九条の女か」

ガタイのいい角刈りの男が部屋に踏み込んできた。ギョロツとした大きな目に、過去に骨折でもしたのか、不自然に曲がった鼻。その顔がなんとも恐ろしくて、思わず後ずさりする。

「ひ、人違いです。私は、こっ、この料亭の従業員で——ひっ！」

ずかずかと近づいてきた男の手に小刀が握られているのを見て、いちかは凍りついた。

男が古傷の残る唇を奇妙な形に歪める。値踏みするかのごとくいちかの全身を眺め、そして、誰かの血で汚れた小刀をこれ見よがしにちらつかせた。

「おねえさん、下手な嘘でごまかしてもいいことねえよ？」

「や……やめてください」

男の喉からぜいぜいという笑い声が響く。

「俺も手荒な真似はしたくねえんだけどさ、アンタを組に連れて帰れば、九条にかすめ取られた金、戻ってきそうだと思つてよ」

(……は?)

ヤクザの事務所に通われていかれるなんて、洒落にもならない。いちかは勇気を振り絞つて男の目をまっすぐに見る。

「わ、私はあの人と関係ありません」

「……ああ？」

男の表情が急に変つた。

後ずさりを続けるいちかの肩に、ざらりとした砂壁が触れる。左は壁、右側にはハンガーラックがあり、壁際にできたくぼみに身体がすっぽりと嵌つた状態だ。逃げ場はない。男はなおも距離を縮めてきて、顎がいちかの額に触れそうなところまで近づいた。

「とぼけんじゃねえぞ、コラア！」

「きゃあつ！」

ドスの利いた恫喝に心臓が潰れそうになる。さらに剥き出しの二の腕を掴まれて、いちかはいよいよ恐慌状態に陥つた。

もうなりふり構つてなどいられない。

胸元を隠していたシャツを放り投げ、出口へ向かつて足を踏み出した。しかし相手は男だ。大柄で力も強く、がっしりと掴んだ腕を簡単には放してくれない。男の手を振りほどこうと、肘をぶんぶん振り回す。

「放して!!」

「うるせえ、このアマー！」

知性を持たない獣のような目を輝かせ、男が小刀を握った拳を振り上げた。いちかは鋭い悲鳴とともにその場にうずくまり、目をつぶる。

——終わった。

まさか自分の死が、こんなにも唐突に訪れるとは思ひもよらなかつた。しかもヤクザに襲われて命を落とすなんて。

いち教師として、自分はそれなりにやってきたと思う。かわいい子供たちに、日々起こる小さなトラブル。それを乗り越えた先にある大きな喜び。

心残りなのは、育ててくれた両親に別れの挨拶とお礼が言えなかつたことだ。まふたの裏に浮かぶふたりの姿に手を合わせる。

(お父さん、お母さん、先立つ不孝をお許しください。神様、ついでと言つてはなんです、もし

も生まれ変われるとしたら、今度はアラブの石油王か、絶世の美女でお願いしま——」

「ギヤアッ！」

潰れた蛙のような声が響いて、いちかは心臓が止まるかと思うほどびっくりした。何が起きたのだらうと目を開けてみたところ、小刀を持った男の手が、その後ろにいる何者かによって高くひねり上げられている。

気づけば握られていた腕が軽い。鼻の曲がった男は、うつ血した手を震わせて苦しそうに呻いていた。龍臣だ。男の後ろに、紋付袴姿の龍臣がいる。

「バカ野郎。女に手え出してんじゃねえよ」

彼は低い声で言うと、男の身体をぐるりと回し、背中を後ろから蹴り飛ばした。憐れ男の身体は吹き飛んで、襦袢をぶち破り、隣の部屋にどさりと倒れ込む。

「九条さん……！」

とっさに男の名前が口をついたことに、いちかはびっくりした。

「遅くなって悪かった。大丈夫か？」

目の前に覆いかぶさるようにして片膝をついた龍臣が、いちかの頬に手を当ててくる。あたたかくて大きな手だ。彼の親指が頬をそっと撫でた時、自分が涙を流していたとはじめて知った。

「あ、ありがとうございます」

鼻を吸りつつ礼を述べ、龍臣の目を見る。

白目がちではあるがよく見るとまつ毛が濃く、きれいな二重だ。その眼差しは優しく、わずかに

弧を描き……そして、いちかの胸元にとっくりと見入っていた。

「……ちよっ！」

慌てて両手で胸元を押さえる。すっかり忘れていたが、ブラの上にキャミソールしか着ていないのだ。

「残念。いい眺めだったんだがな」

しれっと言つて立ち上がる龍臣をいちかは睨みつけた。しかし、彼の後ろにのっそりと迫る影が見え、すぐに息をのむ。

鼻の曲がった男はまだ伸びていなかったらしい。男は手に小刀を取り戻していて、だらだらと鼻血を垂らしながら龍臣を見据えている。

「九条さん、後ろ！」

いちかが声を出すより早く、男が龍臣の背中めがけて突進した。

龍臣が悠然と振り返り、やや上体を倒して男の腹部に向け後ろ足を蹴り出す。しかし今度は敵も警戒していた。すんでのところで龍臣の蹴りをかわし、もう一度勢いをつけて腕を前に突き出す。

「おっと」

すぐに体勢を立て直した龍臣が横にスライドして攻撃をよけ、男の腕を掴んだ。そのまま男を振り回し、思い切り背中から壁に叩きつける。

派手な音を立てて建物揺れた。男は後頭部を強打したのか斜めによるめきつつ、いちかのほうへやってくる。

「きゃあ！」

男が刃物を握ったほうの手を振り上げた。

刺される——そう思い身を硬くした瞬間。

「うおらあああああ！」

龍臣が雄叫びを上げながらふたりのあいだにダイブしてくる。どすん、と目の前に彼の大きな身体が倒れ込み、衝撃で畳が揺れた。

「おい、大丈夫か？」

龍臣が背中を向けたまま少しだけ首をこちらへ向ける。どういう状況かわからないが、とりあえず助かったようだ。

「え、ええ」

取り急ぎ返事はしたものの、脚が彼の上半身の下敷きになっているため身動きがとれない。こちらを向いた彼の背中はぶるぶる震えている。

(お、重い……一体何がどうなったの?)

いちかは戸惑ったが、すぐに龍臣の身体が向こう側へ回転して、脚がフツと軽くなった。急いで脚を引き抜いて、ふたりの様子に目をやる。

仰向けになった男の上に、龍臣が覆いかぶさるような格好になっていた。刃物を握った男の手首を龍臣が掴み、渾身の力で押し戻そうとしているところだ。ふたりともすごい形相をしている。

男の顔面にぼたぼたと赤い雫が滴るのを見て、いちかは血の気が引くのを感じた。出血している

のは龍臣のほう。いちかと男とのあいだに割って入った時に腕を負傷したらしく、袖口に覗く太い前腕に、ひとすじの赤い川が流れている。

まさか、身を挺して守ってくれたのだろうか。

死を免れた安堵よりも、赤の他人に対してなぜそこまでするのか、という驚きのほうが大きい。

自分がいなかったら龍臣は怪我なんてしなかっただろう。そう考えると申し訳ない気持ちになっ  
てしまう。

ふたりの男たちは揉みくちやになって、互いに上になったり下になったりしながら転げ回っている。ふたりとも血だらけだ。壁に叩きつけられた龍臣の手が、男の腕から離れた。すぐさま男が、刃物を持った手を龍臣の顔の近くで振り回す。

いちかは両手で口を覆い、息をのんだ。が、次の瞬間、素早く身をかわした龍臣が男の手首を畳に押さえつけるのを見て、思わず安堵する。

(いやいや、なんで私がホツとするのよ……!)

なんだか胸がもやもやする。龍臣は自分を守ってくれたけれど、ここを逃げおおせれば今後関わることは一切ない。肩入れする筋合だつてないのだ。

「早く、逃げる」

龍臣がこちらを見ずにかすれた声で言う。

「ども」

「いいから行け」

そう言われたいちかは、揉み合っているふたりを尻目に素早くスーツを着て、転がっている鞆を拾い上げた。

もういつでも逃げられる状態だ。とはいえ、自分をかばって怪我をした龍臣をこのまま置いていつていいとは思えない。

どうするべきかと部屋の入り口でおろおろしていると、下から蹴り上げられた龍臣が目の前に転がってきた。

「きゃっ」

仰向けに倒された龍臣に男が押し掛かろうとする。いちかは咄嗟に、持っていた鞆を男の顔面めがけて振り回した。嫌な音を立てて鞆が命中する。

「ナイス」

そう言っただけで龍臣は怯んだ男に飛び掛かり、馬乗りになって顔面を殴りつけた。何度も何度もはじめから曲がっていた男の鼻がひしゃげるほど、さらに殴る。

男の抵抗がばたりとやんだ。それに気づいたららしい龍臣も攻撃をやめ、すぐ隣へ転がるようにして畳の上に座った。髪はぼさぼさに乱れ、汗で額に貼りついている。

大きなため息をついた彼が、ぎろりと睨みつけてきた。

「……なんだ、まだいたのか」

冷たい視線とその言い草に一瞬怖気づく。しかし――

「あの……怪我します」

「あ？ ……ああ、そうだな。大した怪我じゃねえ」

龍臣は事もなげに言っただけで、血が付着しているのは反対の袖で、手首と肘のあいだに走る傷を拭いた。けれども、拭った傍から血は滲み、ぼたぼたと白い袴の上に落ちては流れていく。

鞆を下ろしたいいちかは、ジャケットを脱ぎ、自分のシャツの左肩の縫い目のあたりを掴んだ。ありつたけの力を込めて引つ張ると、嫌な音とともに袖が肩からちぎれる。

「おいおいおい」

龍臣が目丸くしているのがなんだかおかしくて、いちかは口の端を上げた。袖を長くふたつに折ると、彼の腕を取ってしゃがみ込む。

「あとで絶対に病院へ行ってくださいね」

袖を強く引つ張りながら傷口に巻きつけ、先ほど解いた帯締めでその上をきつく縛った。どこから聞こえていた怒声が、すぐ傍まで近づいている。

「私、もう行かなくちゃ」

「待て」

いちかが立ち上がろうとすると、その手を掴まれた。龍臣が紋付の襟元に手を突っ込み、何かを取り出しているかの手のひらに押しつける。

「この廊下を戻って、最初に交わったところを右に曲がると裏口へ出る。表通りに出たらタクシーを拾え」

広げた手の中には、銀色のマネークリップに挟まれた一万円札の束がある。

いちかは目を丸くした。こんなものを受け取れるはずがない。龍臣に返そうと足を踏み出した瞬間、鋭く息をのむ。

彼の手には、先ほどまで別の男の持ち物だった小刀が握られていた。龍臣の血を吸った切っ先は、彼が自分とは別の世界に棲む男だと示すごとく、鈍く光っている。

ふたたび冷酷な目つきに戻った龍臣が、小刀をこちらへ向けて顎で廊下を示す。

「さっさと行け。追っ手が来るだろうが」

近くで怒号が響いて、いちかはハツとした。急いで踵を返して立ち止まる。

助けてもらった礼を言うべきなのかもしれない。自分のせいで怪我をしたことを謝ってもいない。

でも、巻き込まれなかったらこんな事態にはならなかった――

しばらく迷ったが、結局何も言わずに廊下へ駆け出した。

すぐ傍で男たちがやり合う音が聞こえる。

いちかはもう振り返りもせず、休日の午後の悪夢に別れを告げた。

翌週の土曜日。

いちかは、都心近くにあるさびれた裏通りを歩いていた。

立ち並ぶ雑居ビルは高さがまちまちで、いろいろな看板が掲げられている。不動産屋、消費者金融、スタジオ、事務所、あやしげな風俗店。古い建物の外壁は軒並みタイルが剥がれ落ち、壁面にはエアコンの室外機や配線が露出している。

時折人が通りかかるが、その姿はスーツだったり、普通の主婦のようだったり様々だ。

いちかがこの通りを歩くのは、実は今日だけで三度目になる。この一週間の合計では、もう十回以上になるだろうか。

あたりを見回して誰もいないのを確認すると、素早く自動販売機の陰に隠れた。ポケットの中であたたまった名刺を取り出して見る。

『東京三本木組 若頭 鬼頭佐一』

名刺の右上には『代紋』と呼ばれる、ヤクザにとつての家紋にあたる模様が箔押しされていた。

東京三本木組とやらも、鬼頭佐一なんて人も当然知らないが、これが唯一の手掛かりだから、名刺の住所を頼りにここへやってきたのだ。

あの日、いちかは龍臣にタクシー代を握らされて、命からがら料亭から逃げ出した。幸いにも追っ手が来ることはなく、表通りに出てすぐにタクシーも捕まり、なんとか事なきを得た。

しかし、アパートの自室に戻って数時間後、ようやく落ちて着いた頃に龍臣から渡されたお金を数えてみてびびりした。

一万円札はなんと十五枚もある。支払ったタクシー代を差し引いても、残りは十四万円以上だ。このダイヤのはまったプラチナ製のマネークリップにしても、相当高価なものだろう。

返してほしいという意思が龍臣のほうにあるかどうかは別にして、いちかにはこれを懐にしまふことはできなかつた。

『たとえどんな理由があつても、不正を働くのはいけない。常に胸を張って生きる』  
両親にそう教えられて生きてきたのだ。

このお金を返そうとすぐに決意したものの、彼の居場所などわかるはずがなかった。ために九条組をインターネットで調べてみたけれど、それらしい情報は一切出てこない。

いちかか頭を抱えたが、そこでふと、先ほど見つけたあるものの存在を思い出した。

龍臣に渡された札束のあいだに、名刺が一枚挟まっていたのだ。和紙で作られた格調高い名刺の文字に、目を走らせる。

「東京三本木組、若頭、鬼頭佐一……さん」

九条組と同じグループの組織か、彼の知り合いだろうか。いずれにしても、名刺を交換した仲間らば龍臣の居場所も知っているはずだ。

問題は相手がヤクザという点だが、手がかりがこれしかないのだから行ってみるほかない。とりあえず、外からちらりと見るだけなら……たぶん大丈夫。

いちかがこの裏通りをうろついているのは、そんな理由だった。

名刺をポケットにしまい、目の前にある古ぼけたクリーム色のビルを見上げる。外壁に取りつけられた袖看板に『東京三本木組』の名前はない。

この一週間、名刺に書かれたビルの前の通りを、ただの通行人を装って何度も通り過ぎた。

もしかしたら、鬼頭佐一を龍臣が訪ねてくるかも——そう考えもしたけれど、さすがに期待が過

ぎたようだ。

それどころか、それらしい人が出入りする場面に出くわすこともなく、今では本当にこのビルを東京三本木組が借りているのかどうか、あやしく思っている。

いちかかため息をついて、自動販売機の陰から足を踏み出した。今日のところはアパートへ帰ろうと駅の方へ歩き始めたのだが……

突然後ろから腕を掴まれ、鋭く息をのむ。

「アンタ、うちの事務所になんか用でもあんの？」

恐るおそる振り向くと、目の前に小太りな中年の男が立っている。

派手な白いジャージの上下に、胸元に輝くゴールドのネックレス。小脇に抱えたセカンドバッグの持ち手は手首に掛けられており、まくった袖口から刺青が覗いていた。

明らかにそっち方面の人だ。左の眉に端を発した傷が、短く刈り上げた髪の中へと消えている。

「べ、別に用なんてありません」

いちかは震える声で言つて後ずさりした。この手の男は先週の出来事で見慣れた気がしたが、やはり怖いものは怖い。

男は紺色のスーツを着たいちかの胸元を眺めつつ、口元を緩めた。

「またまた、本当はうちに用があんだらう？ アンタ、ビデオに出ない？ 知り合いがやつてる撮影現場で女優にドタキャンされちゃってさ。お金、いっぱいもらえるよ？」

(……は？ 撮影!?)

それはいわゆる、AVか何かの撮影だろうか。きっと、タレントや女優になることを夢見る若い女性たちが、こうやって日々犠牲ぎせいになっているに違いない。

わき起こる怒りに唇を噛んで、男に掴まれた腕を強く引く。

「放してください」

「いいからとにかく事務所に来てよ。何もしないからさ」

男がおも腕を引っ張ってくる。

「ちよっと、本当にやめてください！」

「いいからいいから」

「放して……！」

何もしないという言葉が、これほど信用できない人はいない。

男に引きずられまいと、いちかは悲鳴を上げつつ足を踏ん張った。だが男の力には敵かたわず、少しずつ引きずられていく。このままではまずい。建物の中に入ってしまったら一巻の終わりだ。

「お願い、助けて！ 誰か……！」

いよいよビルのエントランスに吸い込まれようかという時、突然男が声を上げていちかの手を放した。反動で後ろへ倒れそうになったところを、誰かの腕に抱きとめられる。

「あつちい！ 熱い、熱い！ ちくしょう!!」

男は泣きそうな顔をして、左手の甲にふうふうと息を吹き掛けた。

驚いたいちかは、自分の背中を支えている背の高い人物を振り向く。その横顔が目に入った途端、

思わず目を丸くした。

「九条さん!」

龍臣はいちかの身体を起こして、スーツのトラウザーズのポケットに片手を突っ込んだ。そして煙草たばこを深く吸うと、大きく煙を吐き出す。

「てめえ、俺の女に手え出してんじゃねえよ」

「……は？」

悠然とした態度で男を見下ろす龍臣を見上げたまま、いちかは眉を顰ひそめた。

(俺の……女?)

ヤクザの女だなんて冗談じゃない。そもそもこのあいだの結婚式はフェイクだったはずだ。

しかし、助けてくれたことは素直にありがたかった。とりあえずこの場合は合わせようと、龍臣の後ろに身を隠す。

ジャージの男は警戒の表情を浮かべて一步後ずさりした。

「アンタ、九条か！ 先週もうちの組のもんがえらい世話になったそうで」

「まあな。俺の一生に一度の晴れ舞台、よくも穢けがしてくれたじゃないの。まったく、親のしつけがなってねえな」

男の眉がぴくりと動く。同時にいちかも顔をひきつらせた。どうやら東京三本木組はあるとき襲撃してきた敵対組織だったらしい。直接、龍臣の居場所を聞いたりしなくてよかった。

「なんだと？ てめえ、うちの親父にアヤつける気か」

「……ああ？ 元はといえば、お宅さんのほうがうちの取引に首ツッコんできたんだろうが」  
とんでもなく凶悪な顔つきで、ぼきり、ぼきりと龍臣が指の関節を鳴らす。いちかは嫌な汗が噴き出すのを感じた。ため息交じりに彼が続ける。

「あそこは俺が地主のもとへ何年も足繁く通って、やっと買い上げに成功した土地なんだ。その土地を、昔から大切に付き合ってきたお得意さんに何度もプレゼンを重ねて、ようやく契約に漕ぎつけたんだぞ？ それなのに、急に横から入ってきて一枚噛もうなんて、そんな虫のいい話があるか」

龍臣はそこまで言うと、素早く手を伸ばして男の胸倉を掴んだ。

「おい、お前んとこの親父に言っとけ。今度うちによっかい出したら、てめえんとこにダンブで突っ込んで、このビルごと破壊してやるってな」

「な……なにい？」

背の高い龍臣に半ば吊るされている男の顔が、怒りで赤黒く染まる。男は龍臣の手を振りほどき、持っていたセカンドバッグをエントランスの床に叩きつけた。そして、ジャージの胸元からナイフを取り出す。

「野郎……ナメやがって！」

「やめとけ。てめえじゃ勝ち目はねえよ」

龍臣が言い終わる前に、男がナイフを持って飛び出してくる。

龍臣はいちかの身体を後ろへ押しのけつつ、素早く横にスライドして男の攻撃を避けた。勢い

余って倒れ込んだきた男の首筋に、煙草の火を押しつける。

「ぎゃっ」

男は呻いて、腰を屈めた状態で首筋を押さえた。龍臣がその首根っこを押さえて、男の顔に膝蹴りを入れる。何度も何度も、容赦なく。何かが砕けるような嫌な音とともに、男はビルのエントランスにどさりと倒れ込んだ。

「まだ寝るには早い時間だぜ」

龍臣は男の襟首を掴んで無理やり立たせると、今度はその頭をエントランスの壁に叩きつける。

いちかは短く悲鳴を上げて口を押さえた。壁のタイルには、はつきりと血の筋ができている。

「もうやめてください、死んじやいます！」

震えながら龍臣のスーツを引っ張る。そこへ、ビルの上階から人が大勢下りてくる音が聞こえてきた。いちかが鋭く息を吸い込んだ瞬間、薄暗い階段の上に、スーツやスカジャン、スポーツブランドのスウェット姿といった、様々な服装の男たちが現れる。

五人はいるだろうか。いくら龍臣でも、たったひとりでこれだけの人数を相手にしては、勝ち目がないだろう。

いちかはそこでふと思ひ出した。肩から提げた大きな鞆の中に、万が一に備えて催涙スプレーを忍ばせてあることを。もしもおかしな奴らに捕まったら、これを使おうと思っていたのだ。

「てめえ九条か！」

「死ねやコラァ！」

男たちが怒号を上げて迫ってくる。龍臣は、顔中から血を流して脇に倒れているジャージの男の襟首を掴むと、向かってくる男たちのほうへ投げた。

(今だ！)

男たちの足が一瞬止まった隙に、急いで鞆から催涙スプレーを取り出し噴霧する。

「ぐあつ」

オレンジ色の液体が顔に掛かった途端、彼らはその場にうずくまって苦しみ出した。目が開けられないのか、やみくもに両手を振り回している。

「お前、なんでものを——逃げるぞ！」

「ひゃつ」

口元を袖で覆った龍臣に、いちかは勢いよく腕を掴まれた。その拍子に取り落としたスプレー缶を拾う間もなく、裏通りへと走り出す。ビルの入り口で咳込んでいる男たちの、弱々しい罵声を後ろに残して。

数分後、いちかを乗せた龍臣の車は、新宿方面へ向かう大通りを走っていた。車はびかびかに磨かれた黒色の国産高級セダンで、内装は洒落た黒一色。包み込まれるような本革シートが身体の内面にフィットし、乗り心地も大変いい。

いちかは両手のひらを天井に向けて膝の上に置いていた。催涙スプレーを使ったあとで顔に触れると、同じ効果が使用者の身にも起こるらしく、どこにも触るなど龍臣に言われたのだ。

助手席に座るいちかのシートベルトは、龍臣が装着してくれた。

その時に彼の手がたびたび身体に触れたが、嫌な気持ちにはならなかったのが不思議だ。命の危機、あるいは貞操の危機を二度も救われているからだろうか。

その龍臣はというと、車を走らせ始めてからというものの、むつつりと黙りこくったままにいる。もしかして機嫌が悪いのかもしれない。それとも、運転中に話し掛けられたくないタイプなのか。彼が気だるげにくゆらす煙草の煙すら重々しい。

「あのー……」

いちかは恐るおそる声を掛けた。が——

「ああ？」

ドスの利いた声が返ってきて、びくりと肩を震わせる。

(や、やっぱり怒っていらっしやる！)

龍臣はまた前を向いてしまったが、助けてもらった礼をまだ言っていない。意を決して、いちかは背筋をぴんと伸ばした。

「先ほどは助けていただいてありがとうございます。それから、先週の土曜も。……腕の怪我、大丈夫でしたか？」

しばらく待ったが返事がない。小さく咳払いをして、ちらりと龍臣の顔色を窺う。

しかし、彼は険しい顔で前を見たまま何も言わない。窓の外へ向かって最後の煙を吐き出すと、無言でパワーウィンドウを閉めた。

(うう……)

「いちは俯うつむいて、膝の上に置いた両手を握りしめる。外からの音が遮断しよだんされてしまうと、さらに居心地が悪い。彼は会話をする気がないので、と諦めかけた時、運転席から声が聞こえた。

「あんなのはかすり傷だ。それより、お前はなんともなかったのか？」

「……えっ？ は、はい。私はお陰様でびんびんしてます」

「今まで不機嫌だったのに氣遣われたことが意外すぎて、一瞬何を言われたのかわからなかった。なんだかんだ言つてこの人は優しい。彼のことは何ひとつ知らないが、今の時点ではそう思う。」

「あ、あの……この車、一体どこへ向かってるんですか？」

「とっかかりができたところで、気になって行先を尋ねた。前方に出てきた青い案内標識の行き先には、『王子』『池袋』方面とある。」

龍臣はオールバックにした髪を手で軽く梳すいて言った。

「うちの事務所だ」

「はあ、なるほど」

と、適当な相槌あひぢを打ったのち、座席のバックレストからがばりと背中を起こす。

「ええっ、まさか、ヤクザ……さんの事務所ですか？」

「手を振り回すなよ、薬の成分が舞うだろうが」

龍臣は軽く咳込みながら、迷惑そうにいちかを見た。

「ああ、今向かってるのはうちの組の事務所だ。お前さんがへタ打ったせいで、匿かくまわなきゃならな

くなつたんでね」

「匿かくまう？ 私を？」

盛大なため息をつき、彼がこちらへ苦い顔を向ける。

「お前、馬鹿なのか？ せっかく先週逃がしたのに、なんでまたあの時襲つてきた東京三本木組の事務所の周りをうろついてんだよ」

「あまりの言い草に、いちは思わずムツとした。龍臣が不機嫌な理由がわかったが、何も知らない素人しよとを馬鹿呼ばわりするとは、口が悪いにもほどがある。」

「だって、料亭に襲撃を掛けてきたのが東京三本木組だったとは知らなかったんです。そもそも私があの場合にいたのは——あっ」

「いちは途中で言葉のみ込むと、しまった、とばかりに口をぽっかりと開けた。すっかり忘れていたが、龍臣にお金を返さなければならぬのだった。」

慌てて鞆たばを探ろうとして、両手が使えないことを思い出す。手を宙に浮かせたまま、龍臣のほうに向き直った。

「私、先週九条さんから預かったお金を返したくてあそこにいたんです。九条さんの居場所がわからなくて困つてたところ、お札のあいだに東京三本木組の名刺が挟まってるのを見つけて——」

「はあ!？」

龍臣は眉間に深く皺しわを寄せ、さらに片方の眉を上げるといふ器用な表情をした。すぐにハザードランプを点灯させ、車を左に寄せてサイドブレーキを掛ける。

来るぞ、来るぞ、といちかは身構えた。きつと怒鳴られるに違いない。この手が使えたら、せめて両手で頭を覆うのに。

龍臣が身体をよじつていちかのほうを向き、大きく息を吸い込む。

「このくそ馬鹿野郎！ てめえは一体何考えてんだ！ 死にてえのか！」  
(ひいっ!!)

予想どおりに罵倒されて、心臓が止まりそうなほど驚いた。何もそこまで言わなくなつていいではないか。こちらはヤクザの組員ではなく、市井に生きる普通の女なのに。

シヨックで涙が溢れてきたが、両手が使えないので拭えない。懸命に目をしばたいてみると、龍臣が手を伸ばしてきた。

叩かれるのかと、思わず目をつぶる。ところが、頬に触れる指が涙をそつと拭つたのに気づき、まぶたを開けた。

「く、じょう……さん？」

どこか困つたような表情を浮かべた龍臣の三百眼が、すぐ目の前で優しく揺れている。

いちかの胸はどきどきときどきと高鳴つた。あの時と同じだ。料亭で起きた抗争の際にも、彼はこんなふうに頬を伝う涙を拭ってくれた。

「うちの若いのが気づいて俺に知らせたからなんとか間に合つたものの、少し遅かつたら危ないところだつたんだぞ？」

「あの名刺しか、九条さんの手がかりがなかつたんです」

半ばしゃくり上げながら弁明すると、龍臣は何度も頷いて理解を示した。

「祝言の前に三本木組と仕事でトラブつて、話し合いをしたんだ。その時の名刺を挟んで忘れたままお前に金を渡したのは、確かに俺がうかつだった。しかしな——」

龍臣が急に真面目な目つきになり、いちかを見据える。

「いいか？ ヤクザの事務所の周りにはな、監視カメラがクソほどついてんだよ。お前があつての辺をうろついている姿が、バッチリ映つてたはずだぜ」

「監視カメラが……？」

いちかが瞬きをすると、涙がまたひと粒頬を滑った。それを龍臣は親指で拭い、いちかの目を穏やかな顔で覗き込んでくる。

「お前、あのビルの前を何度も行き来したか？  
こくり、こくり、といちかが頷く。

「もしかして今日だけじゃなく、この一週間、俺を探してあそこをうろろしてたつてか  
こくこく、とふたたび頷く。

龍臣は大きくため息をついてうなだれた。しばらくすると上目遣いに睨みつけてきて、泣いて熱を持ったいちかの鼻を、指先でピンと弾く。

「いたっ」

「つたく……その度胸が命取りになるんだぞ」

そう吐き捨てた龍臣は呆れた様子だ。

手が使えないいちかは肩口で鼻をこすった。ひどいことをする。優しくされて少しどきどきした自分が馬鹿みたいだ。

いちかは唇を尖らせて、改めて背もたれに寄りかかった。

彼の言うとおりの、東京三本木組のビルの外に監視カメラが「グソソほど」ついているのだとしたら、いちかが一週間も前から何度もあのビルの周りをうろろろしていた映像が残っているはずだ。それどころか、龍臣の女だと思われた上に、催涙スプレーまで撒いてしまった。

きつと恨みを買ったに違いない——そう確信した途端に背筋がゾツとして、勢いよく龍臣を見る。「私……今後彼らに狙われるんでしょうか」

「そうかもな」

また煙草を吸い始めた龍臣が、煙をプカーと吐き出して適当に答える。いちかは頬を膨らませた。「そうかもな、つて……冷たい。九条さん冷たい」

チツ、と龍臣が舌打ちする。

「だから匿うって言うてんだらう？ 余裕がなかったとはいえ、三本木組の名刺まで渡しちまったのは俺のミスだし、そもそもお前を巻き込んだ俺たちが悪い。それに、なんてったって、お前は極道の妻だ」

「妻？ まさか、本当に——」

彼はひらひらと顔の前で手を振った。

「さすがに俺たちはそんなふうに思っちゃいねえよ。だが、先週の祝言で、少なくとも三本木組

の連中は俺の女だと認識しただろう。その女が抗争相手の事務所にカチコんだんだ。今後お前をつけないとも限らねえ」

いちかは細く息を吸い込んで、眉尻を下げなく下げる。

「じゃあ、私を守ってくれるんですか？ 四六時中？ 絶対に？ ひとりになったら危ないですよね？」

息継ぎも忘れて矢継ぎ早にまくし立てた。一般人が突然ヤクザの抗争に巻き込まれたのだから、それはもう必死にもなる。

ああ、と龍臣が頷いた。

「それについては組の者も全員了承してるから安心しろ。二十四時間、お前の気が済むまで守つてやる。言っとくが俺は、約束は必ず守る男だぜ」

いちかは訝しげな目つきで彼を見る。

約束を守るだなんて、ヤクザのイメージから最もかけ離れたセリフだ。これまでのところ龍臣はいちかの危機を何度も救ってくれたが、まだ一〇〇%信用する気にはなれない。

「で？ 俺が渡した金がいくらあったって？」

「十五万です。タクシー代で一部使わせていただきましたが、残り十四万以上あります」

「そんなはした金で……これだからシロウトさんは困る」

吐き捨てるような彼の言葉に、いちかの眉がぴくりと動いた。

彼は今、はした金と言ったのか。若い女性が月にもらう手取り給与の半分、いや、もしかしてそ

れ以上にもなる、十四万円もの大金を。

「……許せない」

「あ？」

スマホを取り出して眺めていた龍臣が、こちらに鋭い目を向ける。

誰もが怖気づきそうな眼差しだが、いちかはもう怯まなかった。背筋を伸ばして深く息を吸い、『教師の顔』になる。

「九条さん。十四万円は決してはした金なんかじゃありません。世間には苦勞して子供を育てているご家庭もたくさんありますし、事情があつて朝ごはんすら食べられない児童だっているんです。

十四万あつたら、何人の子供の食費が賄えると思いますか？」

教育者としての使命に燃えるいちかは、ぴしゃりと言つてやつたことに満足を感じた。けれども彼は無表情のまま何も答えない。睨みあつた拳句、龍臣のほうから口を開いた。

「もしかしてお前、先生でもやつてるのか？」

何を言われるのかと思つたが、他愛もない質問だ。いちかは警戒を緩めないよう、意識して真面目な顔を保つ。

「そうです。申し遅れましたが、わたくし、小学校の教員になつて五年目の二十七歳、萬木いちかと申します」

龍臣が一瞬眉根を寄せ、白目がちな目を見開いた。

「ゆるぎ……？ もしかして、万の旧字体に、木つて書く？」

龍臣が人差し指で、『萬木』という漢字を宙に書く。

いちかは驚きのあまり目を丸くした。思わず手を口に持っていきそうになり、慌てて膝の上に戻す。

「どうしてわかつたんですか？ 一度で聞き取つてもらえたことなんてほとんどないのに、漢字まで当てられるなんて」

龍臣は少し得意そうに口の端を上げた。

「昔、同じ名前の知り合いがいたんだ。しかし——」

そう言つて一旦言葉を切り、地味な紺色のスーツを着たいちかを眺める。

「今日は休みだろう？ なんでスーツなんだ？」

いちかは肩から力を抜いて、笑みを浮かべた。

「今日はちよつと用事があつて学校に行つてたんです。どこかで教え子の親御さんに会つても困らないように、そういう時はきちんとスーツを着ていないと」

「ふうん……俺の中学の時の担任も、ちよつとお前みたいな鉄仮面女だったな」

いちかは短く息を吸い込んだ。

「鉄仮面とか……ひどい！」

怒つた顔をしてみせると、龍臣がくすくすと笑う。普段は恐ろしい形相だが、笑顔は意外にも屈託がなく、彼がヤクザだということを一瞬忘れてしまふようになる。

「いちいちおもしろいやつだな」

「もう、失礼ですよ」

いちかは何れ半分と言って、背中をバックシートに預けた。その反論を完全にスルーした龍臣が、口元に笑みを残したまま、車を緩やかに発進させる。

「ああ、さっきの十四万の件だけだな、それはお前にくれてやる。一度渡した金を返してもらうなんて、俺の美学に反するからな」

「美学」

「ま、身体で返してくれるってんなら話は別だ」

いちかはガバツと身を起こして、龍臣のほうへ勢いよく顔を向けた。

「それはお断りします！」

首まで真っ赤になつて抗議する。それがよほどおもしろかつたらしく、龍臣は今度は口を開けて笑った。

いちかを乗せた車は、一路九条組の事務所へ向かう。未知の世界への不安とともに。

東京三本木組と違い、飲食店や美容室、古着や輸入雑貨を売る店などが立ち並ぶ、割と賑やかな通りに九条組の事務所はあった。

このあたりは都内有数の繁華街ということもあって、夕暮れ近くになつても人の足は途絶えない。メイン通りからは少し外れているものの、人気のスイーツ店やカフェにはこの時間でも行列ができていた。

一階に貴金属買取店が入っているビルの前で、龍臣が後ろを歩くいちかを振り返る。

「この二階がうちの事務所だ。三階が若いやつらが寝泊まりするフロア。四階は俺専用のフロアだが、半分倉庫みたいになつてる。この奥が入り口だ」

龍臣に続いて、いちかも自動販売機の脇から狭い通路へ入った。

ビルに囲まれた通路には、近くの飲食店から流れてくる油の匂いと、繁華街特有の悪臭が垂れ込めている。青いポリバケツが並んだコンクリートの上を進み、右に曲がると鉄製の古い外階段があった。

「なんだか静かですね」

足音を忍ばせて階段をのぼりつつ、いちかが龍臣の背中に声を掛ける。彼は低い笑いを洩らした。「建物の裏側だからな。俺たち日陰者にはぴったりだよ。——ここだ」

龍臣はなんの特徴もない灰色の鉄扉の前で足を止め、カメラ付きインターホンのボタンを押した。応答を待つあいだに足元を見ると、ドアの両脇にはきれいな円錐型に盛られた塩が置かれている。上の隅には監視カメラが取り付けられていた。龍臣が言っていたとおり、このほかにたくさんのカメラが設置されているのだろう。

インターホンには返事がなかったが、しばらくすると電子ロックが開く音がした。建物は古いのに、セキュリティシステムは最新らしい。

「入れ」

先に足を踏み入れた龍臣が、いちかを手招いた。

「おじやましまーす……」

小声で言つて、静かに中へ入る。龍臣がいちかの身体越しに扉を閉め、あたりは暗闇に閉ざされた。

窓はないのだろうか——目を凝らしていると、突然腰を掴まれて悲鳴を上げそうになる。

「こっちだ」

顔のすぐ近くで龍臣の声がした。大柄な彼の胸は、いちかの顔のあたりにある。ただでさえ恐怖で心臓が潰れそうなのに、スーツの胸元から漂う香水の香りと彼の体温に、さらにどきどきが増す。龍臣が木製の扉を開けて声を張った。

「おう、帰ったぞ」

「おかえりなさい！」

一斉に野太い返事があつて、いちかは入り口で足を止めた。

（どっ、どうしよう……やっぱ怖い！）

「何してんだ。ほら」

「きやつ」

ドアの外でどどまっていると、龍臣に腕を引かれた。つまずきそうになりながら事務所へ入った途端、ひとりの若い男が上げた大きな声に跳び上がる。

「ああっ、姐さん！」

（あ、姐さん!?!）

目をぱちくりとしはたたいで、龍臣の背中に隠れた。茶髪の若者はずかずかと近寄つてきて、今にも泣き出しそうな顔をしてみせる。

「はあく、無事だったんスね！ よかつたあく！ 俺、もうヤラれちゃったかと心配で心配で」

「ヤラ、れ……?」

いちかが困惑していると、若者の後ろにいたスキンヘッドの男が、スパーン！ と彼の頭を引っぱいた。びっくりしたいちかは、思わず龍臣の背中にしがみつく。

「いつてえ！ 何するんスカ、兄貴！」

後頭部を押さえつつ振り返った若者を、スキンヘッドの男が睨みつけた。

「バツカ野郎、下品なこと言つてんじゃねえよ！ 手籠めにされる、と言え」

「手籠めに？」

若者がくると振り返り、訝るように眉を寄せる。

「……されてないっスよねえ、姐さん？」

「は、はい。九条さんが助けてくださったので何も……」

「はあく、よかつたっス」

若者はふにやりと相好を崩した。

ショートレイヤーを明るい色に染めた今どきのヘアスタイルに、スカジャンとジーンズという格好のこの男は、かなり若く見える。もしかして、大学を卒業したばかりのいちかの弟と歳が近いかもしれない。

「お前ら、いい加減にしろ」

龍臣が静かに窘める。彼に引っぱられて、いちかは壁際の洗面台へ連れていかれた。丁寧は手を洗ったのち、龍臣に続いて応接スペースの黒い革張りのソファに腰を下ろす。

「いちか。この若いのがシンジだ。こいつが、東京三本木組の前でお前がうるついでると教えてくれた」

「佐々木慎二といいます」

びよこ、と茶髪の男——シンジが頭を下げる。いちかは小さく咳払いした。

「シンジさん、本当にありがとうございます。お陰で助かりました」

腰を上げて丁寧にお辞儀をすると、若者が照れたように頭を掻く。

「いやあ、買い出しの途中でたまたま近くを通りかかったら、とんでもないところに姐さんがいたんで……。あいつら女と見たら見境ないし、武闘派でマジ危ない連中なんで、ヤバかったっすよ」

「武闘派、ですか」

いちかは震えながらふたたび腰を下ろし、ぽつりと呟いた。

武闘派とはどういう意味なのだろう。いずれにしても、龍臣が来てくれなかったら本当にどうなっていたかわからない。

「だったらめでたいで助けりゃよかったじゃねえか」

スキンヘッドの男が横から口を挟んできて、シンジが頬を膨らませた。

「んなこと言ったって、もしも奴らに囲まれたら、俺なんか勝てるわけないじゃないっすか。兄

貴だつて絶対逃げるっしょ？」

「俺は頭脳派だから奴らが気づく前になんとかできんだよ」

と、スキンヘッドの男がうそぶく。シンジは不服そうにしているが、年下であるせいか強く言い返せないようだ。

ふたりのやりとりで呆れた様子の龍臣がいちかに視線を戻し、スキンヘッドの男を顎でしゃくる。

「このうるさいのがユウタだ。こいつらうちの部屋住みなんだが、いつもこうやって喧嘩ばかりしてやがる」

いちかが苦笑いを浮かべてユウタを見ると、彼は恥ずかしがり屋なのか、ぎこちなく頭を下げた。ユウタは縦にも横にも大きく熊みたいな体型で、口ひげを生やしている。上下黒のジャージを着たこの男は、シンジよりも少し年上の二十代半ばといった歳頃だろう。寄ると触ると喧嘩ばかりというふたりは小学校の生徒にもいるので、あまり怖い気がしない。

龍臣がポケットから煙草を取り出すと、すかさずシンジがライターで火をつけた。するとユウタが巨体を揺すってテーブルの端まで行き、ガラスの灰皿を龍臣の前へとずらす。

さつきまで小競り合いをしていたふたりが阿吽の呼吸で動くのがおもしろい。シンジが何かを思いついた顔でこちらを振り向く。

「姐さん。部屋住みつてのは、事務所に住み込んで雑用をこなす係つてことっす。つまり、俺たちは駆け出しの極道つてわけ——」

「てめえと一緒にすんじゃねえよ。あと、しゃしゃり出んな」

「さつきからうるせえぞ、ユウタ」

龍臣が低い声で一喝すると、気をつけの体勢になった若者ふたりがびたりと口をつぐむ。

いちかが奥歯を噛んで笑いを堪えていたところ、事務所のインターホンが鳴り響いた。シンジが壁面にずらりと並ぶ防犯カメラのモニターへ飛んでいく。

「充の兄貴、お帰りっス」

シンジが言うつてすぐに、事務所のドアが開いた。

「ただいま戻りました」

渋い声とともに入ってきたのは、グレーのスーツにネクタイ、銀縁眼鏡というパツと見ヤクザには見えないビジネスマン風の男だ。歳は龍臣よりもいくらか上だろう。青白い頬に細い鼻柱が神経質そうな男は、いちかを一瞥したのち、靴音を立てて龍臣のもとに進んだ。

「ご苦労さん」

龍臣が手のひらを上に向けて差し出すと、A4サイズの封筒がのせられた。彼は煙草を啜え、封筒の中身をあらためる。

スーツの男が厳めしい目つきでいちかを見た。

「社長、そちらの方は？」

「兄さん、姐さん相手にメンチ利かせちゃまずいですよ」

ユウタが前に出るのを、龍臣が右手で止める。

「充、お前は先週の俺の祝言の時にいなかったから知らないだろう。萬木いちかだ」

「若頭の澤田充と申します」

男が深く頭を下げた。いちかは急いで立ち上がり、両手を太腿の前で合わせる。

「萬木いちかと申します。九条さんには危ないところを何度も助けていただいて。……あ、あの、私——」

「表向きは俺の嫁だから、姐さんと呼べよ」

龍臣の発言に、いちかは慌てて言葉をのみ込んだ。

いちかが口を開きかけたのは、まさにそれについて言おうとしたからだ。たとえ表面上の話であっても、事情を知っている組員に『姐さん』などと呼ばれたくないのだ。

よろよろと腰をソファに下ろしたいちかは、片方の膝に手をつけて身を乗り出している龍臣の顔を凝視した。

龍臣が充に真剣な表情を向け、言葉を続ける。

「親父と叔父貴たちは、殴り込み自体なかったことにしたいらしい。よりによって幹部が集まった義理事を穢されちゃ、メンツが立たねえって言うんだらう。もう一度叔父貴たちを呼び寄せて仕切り直すのも難しいしな」

「ええ。俺もそう思いますよ、社長」

充がビジネスマンのような同意の声を上げる。何も言えなくなったいちかは、どんよりと深いため息をついた。

「なんだ？」

「い、いえ……」

こちらに視線をよこした龍臣に、力なく答える。四人のヤクザに囲まれたこの状況で、「反論などできるわけがない。それに、『親父』『叔父貴』とは、宴会場に集まっていた紋付袴姿の強面の男たちのことだろう。龍臣の庇護下を離れば、東京三本木組のみならず、九条組系列のほかのヤクザからも狙われかねないのだ。

「ところで社長」

微妙な雰囲気を充が打ち破った。龍臣が彼に視線を戻す。

「さつき、法務局で若本組の若衆と会いました。同じ中央二丁目の土地贖本を取っていたので、おそらく競合すると思われます」

「だろうな。その件はお前に任せるからうまくやってくれ。……ああ、先週三栖田建設から話が あったラブホの売りの件な、買いたいと言ってきた客がいるんだ。今持つてる貸しビルが赤字続きで、この先首が回らなくなる可能性が高いらしい。もっと高利回りの物件を買って、その収益でなんとか採算を合わせたいんだと」

龍臣が渡した名刺を見て、なるほど、と充が頷く。

「ドツポにはまるタイプですね」

ふたりがビジネス——と言っているのかわからないが——の話を始めたのを幸いと、いちかはさりげなく事務所の様子を窺ってみることにした。

小学校の教室の半分ほどの広さの室内には、応接セットを中心に、壁面には事務機がふたつ、

ロッカー、スチール製の棚、それと、ごく普通の流し台がある。

事務機が置かれた前の壁にずらりと並んでいるのは、監視カメラのモニターだ。いちかがさつき通ってきた一階の通路やビルの前の通り、事務所入り口付近などの様子が映し出されている。

視線を上げて天井近くの壁を見ると、大きくて立派な神棚の隣に、金色の額縁と木目の額縁が掛かっているのが目についた。金色の額縁には、二重円の中に『龍』の文字をかたどった家紋に似たものが。また、木目のほうには筆文字でこう書かれている。

『誠心誠意』

『勤労奉仕』

『社会貢献』

（これは……社是？）

いちかは眉を寄せて瞬きをした。それっぽいいことが書いてあるし、隣でなされている会話はまったくな仕事の打ち合わせであるかのように聞こえるけれど。

ヤクザというからには、やはり彼らも法律やモラルに反した手段でお金を稼いでいるのだろうか。龍臣と充の話はまだ続いている。

「で、買手はいくらまで出せますかね」  
充が尋ねた。

龍臣は適当に眺めていた資料をテーブルに放り投げ、新しい煙草を取り出した。傍に控えていたシンジが火をつけると、ふたたび充のほうへ引き締まった顔を向ける。